

災害と伝承

【西表島の事例】

イリオモテヤマネコの住む島として知られ、世界遺産にもなった西表島の自然と文化を守ろうと、半世紀にわたって活躍した地域リーダーの石垣金星氏は、その遺著（石垣 2023）のなかで「文化力のある島は滅びない」と述べた。自然ばかりが目されることが多い島からのかみしめたい言葉である。これに関連して歴史上の事例をいくつか紹介してみよう。

西表島の浦内川は人気の観光コースだ。マングローブ帯の上流には、雄大なマリウドウの滝やカンビレーの滝がある。しかし、滝へ続く道の船着き場のあたりに戦後まで稲葉という集落があった。昔から田んぼが広がる流域だったことは、なかなか気づかれない。ここには、戦争中に豊富な木材を切り出し障子構築に使うための製材所もあった。

1944年11月上旬、浦内川に大雨が降り続いた。稲葉の家には新盛行雄・浪さん夫妻が、犬が玄関で泳ぎながら鳴いていることに気づいた時にはもう逃げ遅れていた。経験のない洪水に、屋根を破って子どもたちとともにその上に逃げたが、水位が急に上がって家は浦内川の本流の方に流れ始めた。家族は奇跡的にカシの太木に乗り移って救われたが、多

くの人が亡くなり、製材事業も中止となった。これは、水源の森を伐り、枝や根を伐採現場に放置した結果、これらがダムとなり一気に決壊したことで、神罰のような大洪水にみまわれたのだった。

琉球王国の時代から、浦内川は河口から上流まで神聖な川とされてきた。上流部は神域で、稲の育つ時季には、頭巾を被らず、煙を立てず、弁当も持ち込まないなどの、きびしい禁忌によって守られていた。「神々の交際」という意味のカンビレーに立ち入る日をあやまてば、マリウドウの滝壺の巨大なワニが現れ、それが水面を打つ轟音をたてる時、山の本々はなぎ倒され、人間は息絶えたと恐れられた（安溪ほか 1994）。

1771年に八重山の住人の1/3に当たる1万人近くの生命を奪った大津波の後、浦内川の河口は、現在の場所に変わったという。津波の直前に「神の魚」という大魚を獲って、アマダ（燻製棚）で乾燥していた漁師が夜中に聞いたのは、海から上がってきた何者かが魚に問う言葉だった。「あんたはどのくらいの潮を上げたか。海に帰れるか、10日の月ぐらいか」。これに対して、神の魚が答える声が聞こえた。「それだけの潮が上がったら人間



山の幸。中と右の2人は麓にかかったリュウキュウイノシシを背負う。（1988年、クイラ川上流、著者撮影）

は全滅する。自分なら3日月の潮の高さで十分」。男たちは、大津波が来ると悟って高台に逃れ、命拾いした。アマダがはるか上流に打ち上げられたのを見つけて、そこを「アマダウチ」つまり「燻製棚が落ちた所」と名付けた。

戦後は国際的にも翻弄された。1950年の朝鮮戦争で韓国の巨済島に北朝鮮兵士の捕虜収容所を作るため、米軍は西表島の木材を直接運んだ。また、1960年に実施された米スタンフォード大学の総合調査に基づく西表島開発計画には、西表島のマングローブをすべて伐採して水田と養魚池にする収支の見積もりが載っている。具体化していれば、今日の世界遺産登録はなかっただろう。一方で、自然保護を求める暴走もあった。1977年、イギリスのエディンバラ公は、ドイツの動物学者ライハウゼン博士による「西表島をイリオモテヤマネコの楽園とするた

め、住民を全員島外へ移転させて若干のレンジャーだけを島に残す」という提言を日本の皇太子に送り、地元の強烈な反発を招いた。

忘れ去られようとしている地名や伝説、豊かな古謡や芸能などに深く刻み込まれた、西表島の自然への畏敬の念や、犯してはならない聖域（サンクチュアリ）についての在地の知恵をもう一度掘り起こしてみたい。そこには、島の外部からの開発や自然保護のどちらにも欠けていた、このすばらしい自然との共存を果たしてきた島民自身が育んだ本当に大切なものが含まれているはずだ。

（安溪遊地）

参考文献

安溪遊地、石垣昭子・石垣金星・伊谷玄・大場信義・阪口法明・佐竹潤 1994『ヤマナ・カーラ・スナ・ビトゥー——西表島エコツアー

リズムガイドブック』南山舎。
石垣金星 2023『西表島の文化力——金星人から
地球人へのメッセージ』南山舎。